

## 必然性は、自ら行動を起こさせる

2月17日、恒例の「お茶っ子」（社会体験拡大のために年長児が行っている幼児茶道教室）が開かれました。指導者は茶道裏千家教授黒石宗寿先生及びご子息の黒石宗俊先生で、精華幼稚園が「お茶っ子」を始めた平成3年以来ずっと本園においていただいているお茶の先生です。この日は今年最後の教室で、お母さんの参観も許されます。大勢のお母さんが、わが子の動きを見守ります。そのお母さん方に向かって、宗俊先生はこう話されました。

「お茶のお稽古が始まった頃は、子どもたちは、珍しさも手伝っておしゃべりが先に立ち、私の話を聞いてくれませんでした。仕方がないので、私は声を大きくしました。そしたら、子どもたちは叱られたときのようにびくびくし始めました。私はとっさに思いついて、子どもたちに目を閉じさせました。すると、子どもたちは途端に静かになりました。子どもたちは見る事ができないので、耳を働かせたのです。子どもたちは私の話をよく聞くようになりました。」

この黒石先生の話は、実は、人を導くときの鉄則を示唆してくれています。

平成9年度、私の3回目の教育委員会勤めが始まりました。今回の勤務先は静岡市教育委員会学校教育課。学校教育課ですから、任務の中心は各園、各学校の教育の向上です。ですから、幼稚園、小・中・高等学校へ幾度となく指導に出かけます。私も指導主事たちを引き連れて、各校各園を訪れました。まだ合併前のことなので、訪問したのは旧静岡市内だけでしたが、それでも訪問園校は、幼稚園9、小学校59、中学校27、高校2の、97園校を数えました。

園や学校にお邪魔すると、まずはその園や学校の子どもたちにかける思いを伺います。園長先生、校長先生は、それぞれに思いを語ります。①思いやりのある子に育てたい、②友達とかかわれる子に育てたい、③臆せず自分を表現できる子に育てたい等々。園、学校は違っても、思いはみんな同じです。

園、学校は、思いを具現しようとしてそれぞれに策を講じます。友達とかかわる力を高めようとして、「たくさんの友達と遊ぼう。グループで遊ぼう。」と呼びかけます。思いやりの心を育てようとして、「友達に親切にするんだよ。やさしく接するんだよ。」と言ひ含めます。表現力を育てようとして、発言、発表を促します。しかし、どれも今ひとつ盛り上がりません。子どもが今ひとつ乗ってきません。どうしてでしょう。

黒石先生は、子どもたちに目を閉じさせました。子どもたちは目から情報が入ってこなくなりました。子どもたちは何とか情報を得ようと、耳を働かせ始めました。つまり、耳を働かせる必然性が生じたのです。必然——「そうなること。必ずそうなること。」必然性が生じると、人は自ずと行動します。

黒石先生のとられた必然性を生む指導、これは、様々な場面で生かされます。聞く力を伸ばしたかったら、聞かなくてはならない立場に立たせるか、子ども自身が聞きたくなるような状況をつくり出します。読書力を伸ばしたかったら、本を読まなくてはならない立場に立たせるか、本を読みたくなるような状況をつくり出します。人を思いやる心を育てたかったら、思いやらずにはいられない状況に立たせたり、相手を思いやる自分を好意的、肯定的に受けとめさせたりします。友達とかかわる力を高めたかったら、友達を必要とする状況に身を置かせ、友達と一緒に活動する喜びを実感させます。表現力を高めたかったら、表現したくなるような状況をつくり出し、その状況の中に子どもを立たせます。つまり、どんな場合も、子どもに、そうしたい、あるいはそうせざるにはいられないという受けとめをさせるのです。園や学校の策に子どもたちが今ひとつ乗ってこなかったのは、その策には、子どもたちがそうしなくてはならないという必然性を感じる事ができなかったからでしょう。

ところで、今、表現力を高めるには表現したくなるような状況に子どもを立たせることだと言いましたが、表現したくなるような状況とはどのような状況なのか、そして、そのような状況はどのようにして生み出すのか、次号は表現力の育て方について考えてみることにいたしましょう。

## 「聞ける」「見られる」は表現力を生み、伸ばす。

2月に行われた小学校入学前説明会。給食主任が学校給食について説明しています。「しばらくすると給食が始まります。お子さんたちにとっては、初めての学校給食です。給食は給食センターで一括調理されます。……」

そのさ中、一人のお母さんが隣のお母さんに話しかけます。「清水区ではそれぞれ学校で作っているんだって。静岡方式と清水方式の違いだそうよ。」「昔は静岡でも学校で作っていたんだよね。その方がいいわよねえ。できたてが食べられるし。」「でも、センターで作ったほうが安上がりじゃないの。一度にたくさん作れるから。」

「ナプキンは毎日取り替えます。ですから、2枚以上用意してください。お母さん方と一緒に子どもたちの衛生面を……」給食主任の話は、すでに持ち物の説明に入っています。でも、このお母さんたちのひそひそ話はまだ続いています。

さて、ここで最初に話しかけたお母さんについて考えてみましょう。このお母さんは、いただけない面はありますが、うなずける面も有しているといえそうです。いただけない面というのは、言うまでもありません。話し手の前で私語を始めてしまったことです。小学校の給食主任はお母さんたちのために説明しているのですから、その人の前でのおしゃべりなど厳に慎まねばなりません。話し手に対して無礼千万です。しかし、一方、このお母さんは給食主任の話が元で私語を始めてしまったわけですから、見方を変えれば、このお母さんは給食主任の話に敏感に反応したと見ることができます。給食主任の話の主體的に聞き取り、意味を理解したゆえに起こった私語と見ることができるからです。

人は、何かが自分の心の中に描かれると、それを人に伝え、賛同や共感を得たくなります。描かれた思いがはっきりしていればいるほど、伝えたいという思いが強くなります。みんなで一緒に思案していてふと妙案を思いついたときなど、言いたくて言いたくてまるでつぼにはまってしまったときのように興奮を覚えるのは、その最たるものといえましょう。このお母さんも給食主任の話を聞いて頭をよぎった思いが結構強かったため、すぐ人に伝え、同意、共感を得たいという衝動にかられたと見ることができます。

このことを先月号にあてはめてみましょう。先月号の末尾で、「表現力を高めるには表現したくなるような状況に子どもを立たせることだ」と記しましたが、このお母さんもこの点においては、まさにこのような状態に至っていたのです。つまり、頭の中に強い思いが浮かんで、表現したくなるような状況に至ったのです。強い思い——一般にそれは共感でもよいし、矛盾感でも結構です。共感が共鳴に変わり、矛盾が疑問や反発に変わるようなら、なおよいわけです。共鳴、疑問を乗り越えて発見や驚嘆にまで至ったとしたら、もう何をかいわんやです。

そのような共感や矛盾感を抱くには、まずはしっかり聞くことです。また、しっかり見ることです。じっくり耳を傾け、じっくり目を凝らせば、必ずそこに心を動かす何かが見つかります。何かが見つめれば、子どもたちは、何も言わなくても発信してきます。子どもたちに、まずは聞かせましょう。まずは見させましょう。聞こうとすれば聞こえ、見ようとすれば見えてきます。そして、そのために、日ごろから私たち大人は、親は、子どもの範として、心を込めて話を聞き、心を注いでものを見る姿を子どもたちに見せ続けていきましょう。

(平成18年4月)

## 感性を育てるには (その1)

「豊かな感性、確かな知性、健やかな心身」——繰り返して口にしてみますと、どこかで耳にしたような気がしてきます。耳慣れた単語が並びその上語呂もよいため、三つの言葉にリズムが生まれ、初めて耳にしたとしても何ら違和感を感じません。実は、これは、静岡県が掲げる人づくりの指針です。豊かな感性と確かな知性を具え持ち、身も心も健全な人。なんて素敵なお人でしょう。静岡県はそんな人づくりを目指しています。

ところで、耳慣れた単語と言いましたが、「豊か」にしても「確か」にしても「健やか」にしても、また、「感性」にしても「知性」にしても「心身」にしても、本当にこれまで何度となく耳にし、また口にしてきた言葉です。中でも感性は、機械的物質的そして合理的な生活観や行動観が日本全土を覆い尽くしてしまった今日、その谷間に埋もれた心の癒しを求める動きの中で一躍脚光を浴びた言葉です。加えてどことなく美的に響くため、憧れにも似た追い求めがなされた言葉でもあります。

花を愛し花を愛でる人、音楽を愛し音楽のあれこれを語る人、人々はこのような人を豊かな感性の持ち主と称します。絵において多くの人々が感嘆したり賛辞を送ったりするような作品を仕上げたときも、人はやはり、その人を感性が豊かだと評します。人は、感性とは、美を感じ、美に感嘆し、美を愛する心だととらえます。

それは確かに当たっています。美を感じ、美を愛すれば、心が癒されます。感性は、機械的合理的な生活様式や行動様式が大手を振って歩き始めた今日の世界の中にあって、一服の清涼剤の役割を果たすからです。それより何より、成熟社会に突入したとはいえ目を覆い耳をふさぎたくないような事件が後を絶たない今日この頃、美に感動し美を愛する心が健在なら、誰しも、心は和み癒され、悲惨さとは無縁の世界が訪れると考えるでしょう。心を育てる教育の重要性が声高に叫ばれるのも、その趣旨はこのあたりにありそうです。感性の育成は、まさに心の教育の中核を担っていると言えましょう。

では、子どもたちの感性を育み伸ばすにはどうしたらよいのでしょうか。美に感動し美を愛する心を育てるのだから、うつくしいものに対面させればよい。花を眺めさせたり、きれいな絵を見せたり、美しく心安らぐ歌声や音色に耳を傾けさせればよい。——人はまずそう考えます。もちろんそれは間違いではありません。美しいもの心地よいものにふれて感動することは、感性の育ちに欠くことができないからです。しかし、そのとき、その感動をより大きくさせるために心に留めておいてほしいことが一つあります。それは、美しく感じるのとは真反対の感覚、あるいは心地よく感じるのとは相反する感覚、言うなれば「醜」と感じたり「不快」と感じたりする心も、常日頃から大事にしていきたいということです。これは、停電のさ中突然電気がついたとき、あるいは、暴風雨を丸一日しのいだあくる日、抜けるような空の青さに目をしばたいたとき、電灯の明かりのありがたさをこの上なく感じたり、晴天の嬉しさを普段にもまして感じたりしたことを思い起こして見れば、後はもう何をかいわんやです。

私たちは、感性というと、とかく美しいもの、清いもの、すがすがしいものなどいわゆる誰もが心ひかれ、好み求めるもの、つまり人々が正の方向で受けとめるものにだけ目を奪われがちですが、その逆の、例えば悪い、汚い、醜いなど、いわゆる負の方向として敬遠されがちなものにもきちんと目を向けて、それはそれでありのままに不快だとかいやだとかしっかりと感じ取ることの大切さを忘れてはなりません。負の方向にもきちんと反応する感覚が育てば育つほど、正の方向に反応する心も大きく育つので

(次号に続く)

(平成18年5月)

## 感性を育てるには (その2)

「園長先生、何してるの。」「棒を立ててるの。」「何で立ててるの。」「きゅうりさんがね、棒につかまって、よいしょ、よいしょって伸びていくんだよ。」「ふうん。」

「園長先生、何してるの。」「あのね、きゅうりさんがね、『よいしょ』ってつかまる棒を立てているんだよ。」「どうしてつかまるの。」「それはね、きゅうりさんはね、……。」「ふうん。」

「園長先生、何してるの。」「あのね、きゅうりさんがね、……。」「ふうん。」

園庭でキュウリの支柱を立てている私のところへ、次々と子どもたちがやってきます。そして、次々と質問を浴びせます。でも、発せられる質問はみな同じ。「先生、何してるの。」

「何してるの。」—— 子どもたちの口から最初に出される言葉です。子どもたちは、決まって初めに「何」と問います。それは、目の当たりにしている光景（状況）がどういうものであるか、まずはそれを理解したいからです。

次に子どもたちは、「なんで」「どうして」と問います。目の当たりにしている光景がそのように展開されている必然性を知りたいからです。

そして、「ふうん。」。子どもたちは最後にこう言います。「ふうん。」は事が理解できたことを示す合図、あるいは、理解は不十分であっても、理解に対する試みをこの辺で打ち切りにしたいというときの合図です。意味やことのいきさつがどの程度子どもたちに理解されたかは当の子どもたちでなければ知る由もないわけですが、とにかくこの話題については打ち切りたいというのは、少なくとも子どもたちの主体的意思です。そして、実際に打ち切るのは、場の流れを読んだ子どもたちです。

ところで、子どもたちは知りたがり屋です。好奇心旺盛です。目の前の変化には敏感に反応します。ですから、いつもと違った園長の姿を認めると、すかさずその違いのわけを確かめます。それが、「何してるの。」「なんで……するの。」なのです。「何」「なんで・どうして」と問う子ども、つまり知りたがり屋の子どもは、その問題へのかかわりが終わるまで、終始主体的です。

子どもたちの「何してるの。」「なんで……するの。」には、私たち大人はとことん付き合うことが大切です。次々と発せられる質問は、一つ一つ大事に受けとめてあげることが大切です。それは、知りたがり屋の好奇心は、実は感性そのものだからです。質問を受けとめること、質問の一つ一つに答えることは、感性を受けとめ、感性を育て伸ばすことに他なりません。ぜひとも子どもの立場に立って、受けとめ、答えてあげるように努めていきましょう。

さらに、子どもは親の背を見て育つと言われていています。これは、子どもは日ごろから親の立ち居振る舞いを真似て育っていくという意味です。とすれば、親の感性も、またその感性の幅や深さも、いつの間にか子どもに移り伝わっていくということになります。美しいものを美しいと感じる感覚も、すがすがしいものをすがすがしいと感じる感覚も、親の感覚が強ければ強いほど子どもたちにも強く具わります。そして、それらの感覚よりもっとも大切なのは、人のちょっとした気配り、ちょっとした心遣いに気がつき感謝の念を抱く心や、さりげなく気を配り相手や周囲の人をそっと気遣う心、いふならば人を尊重し大切にするという、心地よく生きていくうえで欠くことのできない思い方も、子どもたちへの具わりは親次第です。

これらの感覚、心、思い方等はまさに感性です。感性もまた「親は子の鑑」。これから育つわが子が豊かな感性を具えていけるよう、私たち親は、ここらあたりでもう一度自らの感覚や心を磨き直す必要があります。

(平成18年6月)

## 早期教育の落とし穴

6月20日、奈良県田原本町で、またまた痛ましい事件が発生しました。報道によると、16歳の長男が我が家に火を放ち、母と幼い弟、妹の命を奪ってしまったとのこと。「なぜ」「どうして」と問いつつ、何とも居たたまれない苦しい思いに立たされたのは、私だけでしょうか。

「父親の暴力が許せなかった」「英語の試験ができたと嘘をついてしまった」「告げ口をする母に恨みがあった」等々、日を追って動機らしきものも明らかになってきているとは報じられていますが、本当のことは当の本人しか分かりません。事件の背景など、部外者の私たちが軽々に口にすべきことではないでしょう。しかし、少年の行為によって3人の命が奪われてしまったことだけは、紛れもない事実です。この消すことのできない事実が、私たちの心までも重く沈めてしまいます。この事件を取り巻く方々が癒される日など、果たして訪れるのでしょうか。

ところで、私は、このたびの事件報道に接して、早期教育の中に潜む落とし穴を見たような思いがしています。私たち親は、みな、わが子には幸せに生きてほしいと願います。そのため、わが子のために何か尽くしたい、何か施したいと考えます。その一つが早期教育です。ピアノが弾けるようにと音楽教室に通わせます。泳げるようにと水泳教室に通わせます。俊敏に動けるようにと体操教室へ、英語が話せるようにと英語教室へ。親は、子どものためと次々教室を物色します。この親の思い、分からないわけではありません。かつて私自身も、一つ二つわが子に仕向けたことがあるからです。加えて情報化社会の急激な進展。教育関係情報も例に漏れず毎日大量に発信されます。戦後の貧困期とは違っておけいこ費が捻出しやすくなった今日、少子化で親の目が子どもに向けられる度が増した今日、親たちにとってこの教育情報は大きな関心事なのでしょう。しかし、私が心配するのはこのことではありません。私の懸念は、親も子どももそのつもりではないのに、いつの間にか激しい競争の世界に引きずり込まれてしまうことです。

幼稚園年少時、ミツオは水遊びが大好きだった。幼稚園のプールで大はしゃぎする姿を見たお母さんは、ミツオが年中さんに進級するや否や、良かれと思って迷わず水泳教室に入れた。ミツオにとってそれは嬉しいことであったが、それもはじめのうちだけで、教室に通うミツオの顔からは次第に笑みが薄らいでいった。遊ぶはずのプールが、いつしかクロールの技術など級を得るための修行の場になっていたのである。しかし、それだけならまだよかったかもしれない。同級生の進み具合を気にする母親の影響もあって、プールがまさにもだちとの等級獲得競争の場へと発展してしまったのである。結果として、対人関係に否応なしに競争を持ち込むパターンがミツオのうちに強化されていった。ミツオはやがて、お母さんが喜ぶ顔だけを求めるミツオに変わっていった。時流れて年長さんになったミツオは、ある日、水着を水道の水で濡らせて帰宅した。

さて、今回の事件に関しては、多くの学者や評論家が論じ始めました。「小さい頃からルールを敷かれ、重圧に耐え切れなかったのではないか」「勉強部屋はICU（集中治療室）と呼ばれていた。医者になれというプレッシャーは相当あっただろう」「中学、高校と自我に目覚め始めたのに、親に方向を固められて窒息状態になっていたのではないか」等々。どれも的を射ているかもしれないし、どれも的をはずしているかもしれない。知るは本人のみです。その本人はすべてをなくしてしまいたいという趣旨の供述をしているとのこと。感情の爆発が現状からの逃避を実行させてしまったのでしょうか、結果は、少年と父親の関係をはじめとし、あまりにもむごい人間関係をいくつも生み、また残してしまいました。

私たち親は、子どものためと思って数々の行動を起こします。しかし、それらはすべて果たして本当に子どもを幸せに導くものでしょうか。子どもの側に立って、今一度見つめ直して見る必要があります。今回の事件を契機として、早期教育の落とし穴について考えてみた次第です。（平成18年7月）